

2. 審査会講評

令和4年度審査会講評

本年度は、当協会職員から8件の研究論文の提出がありました。部門別の内訳は、経営に関するもの1件、歴史・文化に関するもの1件、自然科学に関するもの1件、施設管理に関するもの1件、催事等実施報告に関するもの4件です。研究者の所属別では協会事務局1件、宮崎科学技術館2件、宮崎市歴史資料館1件、大淀川学習館4件となっています。

研究論文は、理事長以下5名で構成する審査会において、審査要領に定める5つの基準に基づき審査及び評価を行いました。

5つの基準とは、①協会の設置目的達成が期待できるか、②研究内容が指定管理者の業務に有効に活用されることにより、業務達成へ貢献できるか、③当該年度に研究する緊要度が高いか、④研究が計画どおり実施されているか、⑤論文の構成が適切であるか、というものです。この基準を踏まえた審査会の評価を以下に述べます。

○全体的な傾向として、研究者は、施設の管理運営や事業等の現状を的確に把握し、そこに存在している課題を掘り下げています。そして、課題と取り組むべき内容を整理した上で、設置目的に沿った改善の方向性を提示、提案しています。

○特に、今年度はコロナ禍の影響を受けながらも、感染対策を講じて各館とも事業を実施しており、事業を行う中で、課題にしっかりと向き合い、改善を提案した研究が見られました。歴史資料館の「体験学習指導の在り方」や大淀川学習館の「触れて楽しむ活動の充実」「水生生物における生体管理システム構築」「館周辺の生き物の効果的な情報発信」など、研究者の事業や運営に対する前向きな姿勢と、来館者への熱い思いを感じる研究内容で、高く評価します。

○また、デジタル化や最新科学の情報提供など、時代の最先端技術の活用に取り組む研究も見られました。科学技術館の「タブレット端末活用」「電視観望」「ロケットに関するサイエンスショー」は、教育施設としての使命を認識しており、その意識の高さを評価します。

○さらにSDGs（持続可能な開発目標）を踏まえ、聴覚障がい者に快適に利用していただけるよう研究した、大淀川学習館の「聴覚に障がいのある方への対応」は、現在の施設の対応も検証することができ、大変、有益な研究であり、職員の努力を評価します。

○最後に、コロナ禍により、施設運営においては、換気、消毒、展示物等の拭き上げ等、職員の負担となる作業が増えています。感染拡大期での開館に際しては、細心の注意が必要であり、精神的負担も大きかったと思います。そのような中、素晴らしい研究活動を行い、論文にまとめた職員の努力に敬意を表します。併せて、サポートいただいた職員の方々にも感謝いたします。来年度の職員の皆さんの新たな挑戦を期待しています。

経営部門

大淀川学習館を利用する聴覚に障がいのある方への対応

大淀川学習館 主事 日高 由貴

聴覚障がい者や難聴の高齢者等の方々に、館をよりよく利用していただくため、様々な改善点について研究しており、大変意義深く、有益な内容です。

研究に当たっては、聴覚支援学校の施設内を見学し、工夫している点の確認や県立聴覚障害者センターの職員の方に来館いただき、助言をいただく等、客観的な視点を取り入れることができました。

来館者の障がいの程度や重複などにより、受付対応、館内案内、川のシアターでの字幕表示等、複数のツールがあることが望ましいため、今後も多くの方の意見を参考にしながら改善を試みてほしいと思います。

また、コミュニケーションボード作成も検討されており、その表示内容についても今後研究を重ねていってほしいと思います。

なお、今回の研究の中で、現在の解説展示等がわかりやすい、掲示物の説明が工夫されているとの評価もいただいております、これまでの職員の努力や熱意にも感謝いたします。

歴史・文化部門

来館者のニーズに寄り添うことで歴史館利用者数を増やすとともに 歴史に学ぼうとする人材を育てる体験学習指導の在り方について

生目の杜遊古館 学習指導員 新町 芳伸

歴史資料館で実施している体験学習について、そのポイントを明らかにし、今後、さらに改善を加えることができないか、また、体験者の感想から、よりニーズに沿った内容にできないかどうか研究したものです。

研究では、まず、現在実施している体験学習の概要と指導のポイントをまとめ、これまでの実践の中で、学習指導員が、体験者にどう指導し、工夫してきたのかよくわかる記述内容でした。

また、指導に関しては、年々、改良を積み重ね、現在の体験学習につながっている点に着目し、受け継いだものをさらに改良・工夫することで体験者の興味や満足度を高めたり、体験者に感想や意見を求め、新たな視点で歴史資料館に足を運ぶ人を開拓しようとする努力が見られます。

今後、アンケートを集約し、参加者の意識やニーズを分析し、体験者に寄り添った指導に役立てていくことと併せ、学習指導員の指導のポイントが確実に受け継がれるような方策や取組を検討していくことを期待しています。

自然科学部門

水生生物における生体管理システムの構築について ～病気の蔓延対策・対応マニュアル作成を通して～

(代表者) 大淀川学習館 技師 濱田 洋輔

大淀川学習館で飼育している水生生物について、病気の蔓延防止対策や生体に異常が発生した際の対応の指針となるマニュアルの作成等、生き物の管理を行う上で重要な課題の解決につながる有意義な研究、取組内容でした。

先進地視察（いおワールドかごしま水族館）では、職員から、薬剤や使用する道具への助言をいただき、それを参考に、大淀川学習館の特色を踏まえたうえで対策を講じました。

具体的には、水生生物の移動に使用する道具の作成や、道具の使いまわしによる病原菌感染回避のため、テープを使った色分けなど、視覚的に把握できるよう改善に努める事ができました。

また、水生生物の隔離や治療に際しては、その記録を確実にを行うため「病気治療・隔離生体記録日誌」を設置するなど、職員間の情報共有を促しています。職員の飼育に対する知識や経験は大事ですが、何よりも職員同士が連携しながら運営に携わっていくことが重要です。

今回の研究や取組は、水生生物を安定的に飼育し、来館者に常時鑑賞していただくためには、とても必要な取組であり、長期的な視点で見ると、展示の質の充実やサービスの向上にもつながり、満足度を高める良い事例になっていると思います。

施設管理部門

小・中学校に配備された一人一台のタブレット端末の 宮崎科学技術館での活用について

協会事務局 学校連携・教育支援調整監 田中 悠

学校で活用が急速に進みつつあるタブレット端末について、学校内だけでなく学校外の施設等での利活用ができないか、その方法を提案、研究したものです。

研究の過程において、宮崎科学技術館での体験活動を核とした系統的な学習の流れの中で、事前学習・体験学習・事後学習の、どの場面でタブレット端末を有効に活用できるかを詳細に分析し、具体的な提案を示しています。この提案には、施設の特性を理解し、学校現場の状況や、年齢に応じた児童生徒の行動と学習に対する理解度を十分に把握している研究者の、教育者としての経験や視点が活かされています。

また、ロイロノートの資料箱活用については、課題もあるようですが、試験的な運用も視野に入れており、今後の活用が期待されるようです。

なお、教育施設としての使命を果たすべく、協会内の他の施設での活用も含め、既存の情報の利活用や他の有効な手段・方法がないか、引き続き、学校や教育委員会と連携、検討してほしいと思います。

催事等実施報告部門

様々な機材での電視観望の実践

宮崎科学技術館 業務課長補佐兼天文係長 安達 大輔

天体観測においては、これまで、望遠鏡による眼視観望が一般的でしたが、近年「電視観望」という新たな手法が注目されており、その手法を、宮崎科学技術館でも導入・実践できないかどうか、検証、研究したものです。

電視観望は、天体望遠鏡に高感度の天体観察用カメラを接続し、パソコン等のディスプレイに画像を映し出すもので、一度に大人数で観察でき、臨場感を共有できることが利点です。また、街中での観望会においては、光害の影響もあり、肉眼での観察が難しくなっていることから、カメラの力を使い、今まで見えなかった天体の観察も可能になるなど、画期的な手法と思われます。

今回、機材の選定やセッティングの検証を行いました。天候により天体観望会での実践には至りませんでした。

今後、実践に向け、職員間でのスキル共有、マニュアル作成の導入準備を進めていくとともに、実践の積み重ねにより、参加者の声や反応を集約した上で、より充実した観望会となるよう研鑽していくことを期待しています。

催事等実施報告部門

ロケットに関するサイエンスショーの実践報告

宮崎科学技術館 業務課長補佐兼天文係長 安達 大輔

昨年度の研究では、ロケットの科学的な情報を普及・啓発するため、サイエンスショーの開発・実施やオリジナル冊子配布を予定していましたが、H3 ロケットの打ち上げ延期もあり、実践に結びつかなかった経緯があります。

今年度は、H3 ロケットの打ち上げを控え、機運が高まる中、実験用ロケットを使い「いつでも行えるショー」「ふらっと見られるショー」を意識し、計画した研究内容となりました。実践に当たって、H-IIA ロケット及びH3 ロケット打ち上げの情報周知も図りながら、日程調整した点は、市民や子どもへの科学の啓発という、宮崎科学技術館の使命に即した取組と言え、評価に値します。

また、サイエンスショーは映像と解説、その後の打ち上げ体験（模擬体験）と全体で約20分程度であり、参加者を飽きさせず、音の迫力もあり、記憶に残る体験につながったと感じます。

今後は、さらに多くの方々に天文、宇宙への関心を高めていただくよう、情報の周知、啓発と併せ、宮崎科学技術館以外でのサイエンスショーの実施など、事業展開の広がりを楽しみにしています。

催事等実施報告部門

「触れて」楽しむ活動の充実に向けて

大淀川学習館 主任技師 園田 恵子

大淀川学習館は、各展示室において、大淀川周辺の生き物を展示し「みて、ふれて、たのしむ」をコンセプトに運営しています。

しかしながら、生き物の多くが展示ケースや水槽に入れられ、来館者は触れることなく観察のみという現状があります。

また、コロナ禍の影響により、人や物との「非接触」が求められる傾向にあり、生き物に触れることは、ハードルが高くなっているという課題に向き合った研究内容となりました。

研究に当たって、「ミニ講座」を見直し、しっかりと目的や実施方法を職員全員で共有し、実施できた点は素晴らしいと思います。

更に、バックヤードの生き物を活用し、来館者に、普段は見られない生き物を見たり、触ったりする機会を提供できたことは、費用対効果を含め、有意義な取組だったと思います。

実施後の検証については、参加者だけでなく職員からのアンケートも踏まえ、次年度の事業計画の立案にまでつなげており、業務改善に大きく貢献した研究内容となりました。

催事等実施報告部門

大淀川学習館周辺にいる生き物の効果的な情報発信について

～来館者のニーズに合わせた生き物マップ作成を通して～

(代表者) 大淀川学習館 主事 吉田 昂史

大淀川学習館の周辺に生息する生き物を採集し、マップを作成・掲示し、来館者に生体の様々な情報を提供しようとする内容の研究でした。

今回、研究の中で「好きな昆虫」についてのアンケートを、夏と冬の2回に分けて実施し、来館者の傾向を探ったようですが、カブトムシ・クワガタムシ・チョウに人気が集まり、必ずしも、館周辺で採集できる昆虫に結びつかなかったことがわかりました。

しかしながら、「特に好きな昆虫はいない」との回答も一定数あり、特定の昆虫展示を目的として来館されていないことも把握でき、逆に、新たな昆虫の情報を提供することにより、興味を持っていただく余地もあるのではないかと思います。

なお、館周辺や館前の池、里山の楽校などには、様々な生き物が生息し、季節によって違う姿を見せてくれます。

今後、マップの活用により、館周辺の散策を促し、身近な生き物を実際に見たり、触れたりすることで、昆虫に興味を持っていただく来館者が増えることを期待しています。

令和4年度研究事業報告書審査会

公益財団法人宮崎文化振興協会理事長

高島 弘行

専務理事兼宮崎科学技術館長

横山 伸子

事務局次長兼経営戦略課長

安藤 邦恵

宮崎科学技術館主任学習指導員

矢野 義継

宮崎市民プラザ館長

羽木本 光男